

透析施設最前線 Vol.3

HOSPYグループ 名古屋記念病院 血液浄化センター

名古屋記念病院 血液浄化センター

所在地 : 名古屋市天白区平針4-305
透析台数 : 56台
看護師数 : 18名
患者数 : 入院患者21名、通院患者132名



■ 入院および通院透析患者さんを支援

1985年に開設された名古屋記念病院は、現在では年間約5000件の救急搬送を受け入れる地域の救急医療の中核施設となった。同病院の血液浄化センターは、入院透析16床と外来透析40床を有しており、循環器・呼吸器・糖尿病などの各分野の専門医も透析医療にかかわり、適切かつ最新の医療が提供できる体制を整えている。入院透析については、総合病院のなかの透析施設として、重症例を含めて各科の入院患者さんを受け入れ、積極的に行っている。一方、外来透析は月曜日～土曜日の昼間と夜間の2クール体制で行っており、ビジネスや観光などで名古屋を訪れる透析患者さんも利用できるよう支援している。

■ 待合室を患者セルフケア教育の場として活用

透析導入期はその後の透析治療を方向づける重要な時期であり、適切な透析治療を長期にわたり継続できるように、患者さんの考えや要望に耳を傾け、患者さんへの理解度を深め、信頼関係を築く必要がある。そのため血液浄化センターでは、透析導入期の患者さんの特徴を踏まえて、導入期教育カリキュラムに沿った啓発活動を行っており、セルフケアの向上をめざしている。

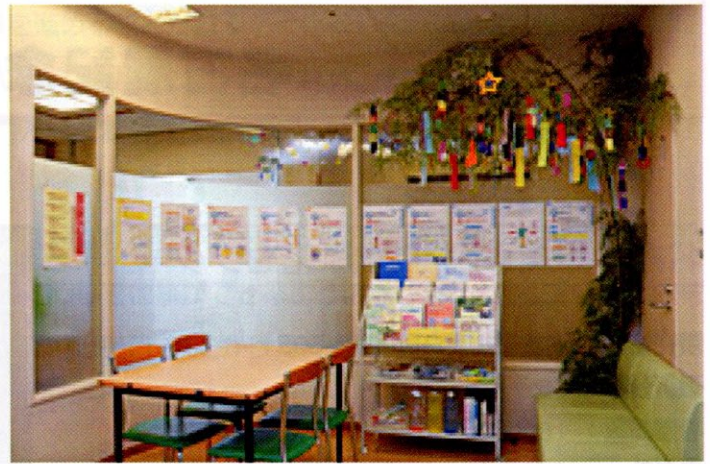
外来透析室では患者さんに対するセルフケア教育の一環として、待合室を利用したDVD・ビデオ学習を行っている。また、待合室の壁一面には透析治療に関する情報が掲示され、透析関連の資料やシャント音が聴取できる教材なども置かれており、患者さんは自由に資料を視聴し、教材に触れることができる。倉田看護師長は、「以前の勤務先である金山クリニックからここに赴任して約1年半になります。当初は待合室には何もありませんでしたが、この限られたスペースを患者さんのために有効活用したいと思い、こうした取り組みを始めました。待合室での待ち時間に、患者さんだけでなく付き添いのご家族に



倉田京子看護師長

も、資料や教材に触れていただくことで、透析治療に対する理解度が深まり、家族からの支援が高まると思います」と、待合室を患者教育の場として活用する意義を語った。

また、内藤看護師は「待合室に置いてあるパンフレットなど、差し上げられるものはお持ち帰りいただいています。ご自宅で資料をご覧になったご家族が感じた疑問点を問い合わせてくる患者さんもいらっしゃいます。以前よりも患者さんからの質問は増えまし、患者さんやそのご家族と会話する機会も増えました」と語り、確実に変化が生じていることを指摘した。



四季おりおりの装飾のある待合室

■ 患者勉強会や行事などを通じて患者さんとのコミュニケーションを大切に

名古屋記念病院では、待合室でのセルフケア教育のほかにも、年に1回日曜日に患者勉強会を開き、患者さんが透析生活で抱えている疑問などをテーマに学習の機会を設けている。シャント管理をメインテーマとした前回の患者勉強会には、約70名に及ぶ患者さんが参加し、熱心に学習を行った。

また、患者勉強会には休日にもかかわらず、透析室のスタッフもほぼ全員参加しており、他にも患者会主催の行事への参加など、患者さんとのコミュニケーションの場を増やすように心がけている。倉田看護師長は「患者会の新年会やバス旅行など、患者さんと触れ合える機会には積極的に参加しています。最近では看護スタッフも積極的にこうした行事に参加するようになり、患者さんへの理解度は深まってきたと感じています」と、患者さんとのコミュニケーションを活性化することの重要性について語った。

■ カンファレンスを通して患者対応をスタッフ全員で検討

血液浄化センターでは週に1回、医師、看護師、臨床工学技士(CE)が集まり、透析看護において問題のある患者さんの事例をとりあげ、今後の対応について検討を行っている。カンファレンスでは、看護師は日常の看護で気付いた点や患者さんからの訴えを報告し、CEは検査値の変化を伝えるなど、お互いに情報交換を行って、解決策を見出そうとしている。倉田看護師長は、「多忙な医師は患者さんの詳細な情報まで把握することは難しいと思います。カンファレンスでは、看護師やCEからの情報に基づいて医師が治療の方針を示すなど、スタッフ間の情報共有が促進され、その後の看護にも役立っています」と、カンファレンスの意義を述べた。

また、看護師とCEによる部署内カンファレンスも別途、行っており、業務の役割分担を決めるだけでなく、患者さんからのクレームに適切に対応するために、お互いの立場から考えを提示して話し合うなど、よりよい看護の実現をめざしている。倉田看護師長は、「透析患者さんが安心して治療が受けられるように、身体と心のケアを行うことが私たち看護師の使命であり、そのために何をやらなくてはならないのかをスタッフ一人ひとりに考えてもらいたいと

思っています。本当に患者さんの心の声を聞いているのか、これは私の看護人生における永遠のテーマでもあります」と、透析看護への思いを語った。

■ 看護スタッフに対する教育やモチベーションアップにも注力

外来透析室では患者さんに対する教育はもちろんのこと、看護スタッフへの教育にも力を注いでいる。愛知県は「透析の本場」と呼ばれるほど透析医療が盛んであり、透析に関するさまざまな講演会や講習会などが活発に行われている。しかし、院内教育はほぼスタッフ全員が参加できても、透析関連学会を含めた院外の学習の場には限られたスタッフしか参加できない。そのため、参加できなかったスタッフを対象に伝達講習を行い、情報の共有化に務めている。倉田看護師長は、「私あてに届いた講習会の案内などはすべて掲示板に貼り、情報をオープンにしてスタッフの参加を促しています。最初は参加する看護師は少なかったのですが、次第に増えてきました。また、各製薬会社の資料は患者さんに提供するとともに、スタッフの学習資料としても活用しています」と述べた。

一方、内藤看護師は「以前は勉強会などの案内の掲示も少なく、その存在自体を知らなかったのですが、いまは掲示板で情報をチェックして、可能な限り参加しています。勉強会に参加することはとてもよい刺激になりますし、今年は学会発表も行いました」と、自身の変化について語った。現在は、透析患者さんをさらに深く理解して看護に役立てるために、患者満足度調査を計画しているという。

こうしたスタッフの意識の変化に対し、倉田看護師長は「この1年半で、スタッフのモチベーションは格段にアップしたと思います。少しずつであっても、意識や行動が変わっていけば、5年後、10年後には、透析看護に揺るぎない自信を持てるようになると思います。将来、そうしたプロ意識を持った看護師に育ってくれることを非常に楽しみにしています」とスタッフに対する期待を語った。



内藤優紀子看護師